

2173年、日本 入寮式 エッセイ

<01>

司会「ただ今から第100回横浜石鹼工場入寮式を始めます。初めに保護区代表山田壮一さんにお話をいただきます」

拍手。

山田「本年度入寮生、194名のみなさん、入寮おめでとうございます。心からお祝い申し上げます」

山田「みなさんは、どこから来たのでしょうか？ 自由区出身という方、手を上げてください」

山田「1人ですか。では管理区出身という方は何人でしょう？」

山田「10人くらいですかね。他はみんな保護区出身ということですね。分かりました」

山田「みなさんは、今日まで12年間それぞれの地域で暮らしてきました。わたしが住んでいる保護区は、自分たちが使うものを自分たちで作って暮らしています。たくさん使うもの、日々必要なものは、区ごとに用意しています。あまり使わないものは、いくつかの区を代表して一つのところで作ります。区同士がネットワークでつながっていて、物の貸し借りをを行っている。管理区や自由区がなくても、保護区だけで生きていける仕組みになっています。保護区の自立性と呼ばれるものです」

山田「では、なぜ保護区には自立性を持たせたのでしょうか？」

山田「そうです。誰からも干渉されずに国土を監視するためです」

山田「かつては、全ての土地が売り買い対象になっていました。水源地となる森林も売買の対象となっていました。その結果、ゴミの不法放棄や開発などによって山間部は荒らされていました。放置された山林や田畑も多数ありました。しかし、違反を取り締まるどころか、存在すら把握されていませんでした」

山田「今は違います。全ての領土は監視下に置かれています。どんな深い山奥にも保護区が作られ、把握されています」

山田「保護区が水源地となる森を守っているからこそ、下流にある管理区や自由区で美味しい水が飲める。共存関係にあります」

山田「水源地を守るため、保護区では使用できるものが制限されています。自然を中心に暮らしているため、変化は緩やかです」

山田「しかし、外からは同じに見える森も成長していきます。十年単位で見れば確実に変わっています。やることは同じでも、対象は変わっているわけです。必然的にやり方も変わっていく。では、誰がどうやって決めるのか。区内の大人たちがみんな話合っ決めて行くわけです」

山田「人の場合も同じです。必要なことは変わりませんが、人は入れ替わっています」

山田「まずは食べて、寝ること。食事と衣服と住居の確保です。続いて共同浴場が用意されます

。子どもや病人は食べて、風呂に入って寝るが一日の仕事になります。少し大きくなると、勉強も仕事になります」

山田「健康な大人は、保護区を維持するための仕事を持っています。山の手入れや田畑の手入れをする人。食事の支度をする人。管理業務をする人。自然の調査をする人など仕事はいろいろあります。しかし、どれも保護区を維持するため、自分たちのための労働です。働けば働くほど確実に豊かになっていきます。生活が充実していきます」

山田「何も起きなければ、かなりゆとりのあるゆったりとした暮らしができます。しかし、台風や地震などの自然災害に見舞われた場合、休み返上で働かなければなりません。他の保護区から応援に駆けつけてくれるまでは、自分たちの力だけが頼りです。ですから、常に災害に備えて食料などの準備をしています。国と子どもたちを守るため、訓練も欠かしません」

山田「自由区や管理区にとっても、自立性を持つ保護区は最後の砦です。いざとなったら逃げ込める場所です。集団生活がセーフティネットとして機能しているわけです」

山田「必要最低限の暮らしが保障されているからこそ、安心して挑戦できるわけです」

山田「あなたがたはこれまで、多くの大人に守られて育ってきました。しかし、寮では自分で自分を守らなければなりません。卒寮すれば、他人を守らなければなりません。守られる側から守る側になる。その中間地点がこの寮生活というわけです」

山田「自分の力を試して挑戦することはすばらしい。しかし、国土を守る仕事も素晴らしいものです。どうかみなさん、知識と技術を身につけて、国土と子どもたちを守るために故郷に帰ってきてください。この国を守る礎になってください」

山田「わたしの話は以上です。本日は本当におめでとうござります」

拍手。

<02>

司会「山田壮一さん、ありがとうございます。続いて、管理区代表金子鉄雄さんにお話をいただきます」

拍手。

金子「みなさん、こんにちは。これから3年間、みなさんと一緒に働く、工場長の金子鉄雄です。どうぞよろしくをお願いします」

金子「みなさんがこれから暮らす横浜工場は、海のそばにあります。山間部育ちのみなさんにとって、海は初めてでしょう。ご覧になってどうでしたか？ 気持ちのいい場所でしょう？ 今日は特に天気も良くて、青く輝いていますね。みなさんの晴れの門出にふさわしい日和です」

金子「横浜は国内第二位の工業地帯です。特に海上貿易がさかんに行われています。大ざっぱに分けて東京が空の玄関で、横浜は海の玄関になっています。多くの工場が、海外へ輸出する商品を作っているわけです。みなさんが作る石鹼は、国内流通が主流です。しかし、天然材料使用ということで、極一部の商品が高級品として海外に輸出されています」

金子「輸出用石鹼は、原材料から厳選して作られた当工場オリジナル製品です。製造に関わることは大変な名誉です。どうぞみなさん、参加できるように頑張ってください」

金子「新しい生活を前に、不安を感じている子もいるでしょう。特に、身の回りのことを親任せにしてきた子には、しばらくは辛い毎日が続くかもしれません。しかし、今日からはみんな自分のことは自分でやらなければなりません。掃除に洗濯、布団の上げ下ろしなどさまざまな仕事があります。食事だけは給食として一日3回支給されます。免除されているわけです」

金子「仕事は大きく分けて、石鹼を作るための仕事と、工場や寮を運営するための仕事に分かれます。どんな仕事につくかは、これから話し合っ決めてます」

金子「希望の仕事に就ける人、就けない人、いろいろ出てくるでしょう。しかし、どうかみなさん、他人と比べて愚痴や不満を言わないでください。どんな仕事も大変で大切です。誰かがやらなければならないことばかりです。要らない仕事は一つもありません。なぜなら、ここでは計画にもとづいて全ての仕事は管理されているからです。作ったけど要らないということがないわけです。逆に言うと、必要とされるだけ作れないと誰かが困るわけです」

金子「寮生活と工場勤務は、どんな仕事にも通じています。ですから、ここで3年間、無事に過ごすことができると、保護区で暮らす資格が得られるわけです。集団生活に適していると判断されるわけです」

金子「なかには集団生活になじめず、逃げ出したくなる子もいるでしょう。そんな時は遠慮なく大人に相談してください。すぐ隣に自由区があるからといって、黙って逃げ出さないでください。逃げた先では過酷な運命が待っています」

金子「工場での経験は、将来、必ずみなさんの役に立ちます。どうかみなさん、逃げ出さないで踏ん張ってください。大人の仲間入りを無事に果たしてください」

金子「わたしからは以上です。みなさん、おめでとう」

拍手。

<03>

司会「金子鉄雄さん、ありがとうございます。最後に自由区代表川上聖司さんにお話をいただきます」

拍手。

川上「みなさん、はじめまして。川上聖司といます。今日はみなさんの大切な記念日にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。一緒に祝えてとても嬉しいです」

川上「自由区代表ということなので、少し自由区の話をしたと思います」

川上「自由区には義務を終えた大人が住んでいます。仕事はさまざまです。起業して会社を営んでいる人もいれば、雇われて働いている人もいます」

川上「管理区との大きな違いは、必要とされるかどうか分からない点です。お客さんを得られるかどうか、常に勝負しているわけです。成功して一夜で巨万の富を得る人もいれば、失敗して破産する人もいます。何をするかはすべて自分の責任にまかされています」

川上「やっちはいけないことはありません。墮落する自由も、死ぬ自由もあります。大変面白い場所です」

川上「たとえば僕のように、音楽で生活している人もたくさんいます。歌を歌って、お金をもらっているわけです。僕のような仕事は全員が音楽家になったら成り立ちません。ですから保護区や管理区では趣味としては許されますが、仕事としては許されない」

川上「他に大きな違いは、お店がたくさんあることです。保護区にもセンターにお店があります。ネットで買い物もできます。しかし、数も種類も少ないです。自由区ではびっくりするくらいいろんな店がひしめきあっています。働いて手にしたお金を使って好きなものと食べて、好きなことができます。自由区では約束事ではなく、お金がすべてを動かしています。お金さえあればなんでもできてしまう。保護区とは遊びも仕事も違います」

川上「僕は、自由区の自由な空気を愛しています。無限の可能性を感じています。みなさんもきっと好きになると思います。大人になったら必ず一度は自由区に足を踏み入れてください。待っています」

川上「最後にみなさんに歌を送りたいと思います。聞いてください」

一曲歌う。

拍手。

司会「川上聖司さん、ありがとうございます。以上で第100回横浜石鹼工場入寮式を終わります」

以上